

そ
う
い
ず

くじけない心



佐原 英夫

私は、生まれながらに両手に機能障害を持つている。今思うと、物心つくころからなにをするにも不自由とたたかいながらくふうを重ねて、知らず知らずのうちに、日常生活が身についてきた。針仕事をしたり、炊事や洗たくをする母のそばで、なんでもさせたと
いう母の思い出の言葉が身にしみる。
私は、小学校に一年遅れて入学して
いる。それは東北医大に通院したり
入院したためである。障害を軽くして
入学させようとの両親の考えからであ
ったと思う。しかし、医学的結果は芳
しくなかったが、病院生活の中で多く
の人の愛情をうけたりつらい手術に耐
えたことが、自分にプラスになったと
思う。

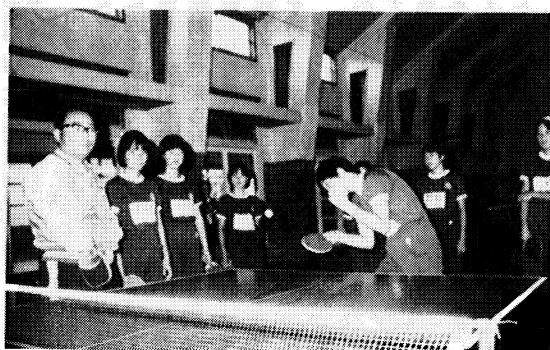
生徒が筆記体を練習したり、作品を

作っている姿を見ると、自分をかえり
みるときがある。鉛筆をもって文字が
書ける自分、ソロバンを一本指でやれ
る自分が不思議でならない。工作で「あ
みわたし」の作業があった。授業中
は片手だけでできる部分をつくり、針
金をまげてあんでいく部分は家で手と
足を使って作った。「なんでもさせよ
う」「なんでもさせた」恩師や両親の思
いやりは、自分には困難になり涙を流
したときもあつたが、それを乗り越え
ていかなければならない精神を育てて
くれた。

両親は、自分を育てる苦勞について
これまでなかなか口に出さなかつた
し、自分も聞かなかつた。この随想を
書くために、初めて自分の障害につい
て話し合つた。両親は、私が知恵づく

につれ心に誓つたこととして、いくつ
か話してくれた。それは、はじめに、
障害を乗り越えて自立していきける強い
意志と明るい生活のできる子にした
い。そして、この世に生を受けたから
には、世のためになることをできる人
間になりたい。つぎに、自分のことは自
分でやる力をつけること、お前は障害が
ある。」ということはひとことも言うまい。
お世話になる多くの人たちには常に感
謝を忘れないこと。報恩の心を育てた
いことであつた。自分の精神力はまだ
まだ未熟であることを痛感した。

私は、不自由だと思うと、不安感が
つきまとうので、できるだけ仕事に熱
中するようにつとめてきた。私の両手
は思うように動かないので、運動技能



「継続は力なり」でがんばろう

はゼロに近い。しかし、卓球だけはな
んとかできる。相手の受け易いところ
にボールをやることだけである。この
卓球には、私の学生時代から教員生活
における不安感を解消する一つの方法
になつている。何か一つのことをくじ
けずにやりとげることが、なによりも
たいせつなことを、今までの人生経験
から強く感じている。

放課後の練習の中で、すぐに技を覚
えてしまう者、いつも真剣なまなざし
でボールに向かつているのだが技の向上
しない者などさまざまである。卓球部
の顧問として生徒を指導するときに、
「技能は問題ではない。どんなにつら
く苦しいときも、それにくじけない強
い精神力をもって障害を乗り越えるこ
とだ」と言い聞かせている。また一度
入部したら退部しないということであ
る。先日、部員の一人が退部したいと
いつてきた。理由を聞いても話さない
ので、本人の良い面を話して退部を認
めなかつた。

私は今、自分に対して卓球を可能に
してくれた恩師、温かい愛のむちを
与えてくれた恩師の姿が浮んでくるとき
感謝の気持ちでいっぱいである。

「目には心を…心には行動を…」と
いう言葉があるが、教師は、生徒の内
にある可能性を引き出し、心身ともに
くじけない人間育成のために、心ある
観察を通して温かい援助の手をさしの
べていかねばならないだろう。

(原町市立石神中学校教諭)